

昨

年八月に広島市安佐南区八木地区などで土砂災害が発生し、住宅地が甚大な被害を受けた。私事であるが、昭和三十年代に八木に親類が家を建てたので、子供の時よく遊びに行った。梅林駅で電車を降り、かなり急な斜面を上がってたどり着いた家からは、太田川が眼下に見える景色だった。今回、まさにこの地区で災害が発生したので約五十年ぶりに現地を訪れたら、山裾までびっしり住宅がはりついて、いることにまず驚かされた。広島市は平地が少なく、海に面した南側以外は高さ五〇〇級以上の山に囲まれている。遠足でこれらの山々に良く登ったが、当時は田畑の中を歩いて山道にたどりついてた。ところがその山裾にかけて急速に住宅地が広がっていった。新幹線で広島駅から東京方面に向かって走り始めるとすぐ左手でこの光景が目につく。帰省する度にどんどん山裾に開発されていく宅地を見て、雨や地震の時にどうなるだろうか？ と最近気になっていた。

今回の災害は猛烈な雨により多くの沢で土石流が発生し山裾に開発された住宅地を襲った被害であるが、二〇一一年東日本大震災でも別の二種類の宅地被害が発生した。仙台市の丘陵の造成宅地では盛土が変状し、東京湾岸の埋立地では液状化して多くの宅地が被災した。仙台市は一九七八年宮城県沖地震、東京湾岸は一九八七年千葉県東方沖地震以来に訪れてみたが、両者共住宅が大幅に増えていたことに驚かされた。

各 人 各 説

最近の住宅地の災害を憂う

東京電機大学理工学部建築・都市環境学系 教授

安田 進

Susumu Yasuda



昭和三十年代から高度成長と核家族化にともなって全国の都市で宅地開発が急速に進められた。都市ごとに開発できる地形は異なり、山裾や丘陵地、埋立地に宅地が造られてきたが、災害に対する配慮が欠けていたことは否めない。さらに、最近の気候変動に伴い降雨強度が強まっていることが被害を加速させている。雨の降り方が猛烈な台湾では大規模な斜面崩壊や土石流が頻発してきているが、我が国も同様になってきたと感じられる。自然斜面の崩壊や土石流の発生は自然現象とも言える。砂防ダムをたくさん造って今回の広島のような土石流を防ごうとするのにも限界がある。住宅の都心回帰や少子化が進んでいく時代なので、山裾の危険地区から移転し、そこを農地などに有効利用するようない切った施策が必要であろう。

一方、地震時における丘陵地の造成盛土の変状や埋立地の液状化による宅地の被害は、費用をかければ防げる。現在、多くの自治体において宅地耐震化推進事業により大規模盛土造成地の抽出が行われ、一部の自治体では危険な宅地の地盤調査も始まっている。液状化に関しては、東日本大震災の復興にあたって創設された「市街地液状化対策事業」と同様の方法で、既設の住宅地を道路等の公共施設と一体化して地区全体で対策することが出来るようになった。今後、これらの事業を適用して災害に強い街にしておくことが望まれる。